

おんたけ まな いしき そな 御嶽に学ぶ意識と備え

27日(木)で2014年に起きた長野県・岐阜県の御嶽山噴火からちょうど5年になります。死者58人、行方不明者5人を出す、戦後最悪の火山災害となったのはなぜでしょうか。今回は、この噴火の被害状況と、噴火から学べる教訓を紹介いたします。

ない水蒸気噴火でした。地中で熱せられた地下水が気化し、水蒸気爆発を起こす噴火で、予測が非常に困難な噴火です。噴火の際には山頂付近に多くの登山者がいて、そのことが被害を拡大させた原因となりました。

なぜ登山者が多くいたのでしょうか。噴火が起きたのは、9月下旬の土曜午前11時52分。紅葉シーズン、週末、晴天、お昼時…条件がそろってしまいました。もし噴火が冬、もしくは平日や夜だったら？ おそらく被害はほとんど

でなかったでしょう。昨日は人間が作ったもので、噴

火が発生するメカニズムとはまったく関係がありません。しかし、噴火がいつ発生するかのタイムミングによって、被害の様相は大きく異なります。災害は、自然現象というだけでなく、人間社会と密接に関係する社会現象でもある、ということをよく覚えておいてください。

噴火後に行われた調査で分かったことがあります。登山者の多くは、御嶽山が噴火の可能性のある活火山であることを知りませんでした。犠牲者の多くは、噴石が直撃して亡くなりました。噴石の大きさは数〜60センチ程度で、時速300キロのスピードがあったとされています。噴煙が上がって周囲が真っ暗になり、噴石が降ってくるまでの1、2分程度の間に、いち早く山小屋や岩陰に逃げ込んだ

人は助かりました。しかし噴火と認識できず、写真を撮っていた登山者も少なくありませんでした。とっさの判断・行動と運が、生死を大きく左右したのです。

御嶽山の噴火から得られる教訓は、登山者自身が危機意識を持つことの大切さです。昨年9月26日から立ち入り規制が一部解除され、山頂に登れるようになりました。登山者はヘルメットなどの安全装備を必ず着用し、いざというときにどのように身を守るのかシミュレーションしておくことが大事です。

登山者に人気のある日本百名山のうち、活火山は30ほどあります。風光明媚な景観と、なだらかな斜面を形づくる火山は、登山やスキー場として人気になっています。加えて火山には豊富な地下水、肥沃な土地、温泉など多くの恵みがあります。世界中から観光客が訪れる富士山も活火山です。

富士山が噴火した1707年の宝永大噴火から300年ほどが経過しました。登山者はもちろん、山麓に住んでいる住民も富士山がいつ噴火してもおかしくないという意識と備えが不可欠です。

(山梨地域防災・マネジメント研究センター、工学部土木環境工学科准教授 秦康範)

やまなし 探・研

被害が大きくなった原因として、規模の大きさを考える人が多いと思います。しかし実際、噴火の規模は小さく、火口から噴出した石(噴石)は、山頂近くの火口から半径1キロほどと狭い範囲に限定されていました。

御嶽山の噴火は、マグマを含ま



御嶽山が噴火し、下山する登山者(登山者提供、2014年9月27日)

御嶽山から上がる噴煙。右奥は富士山。共同通信社機から空撮(2014年9月27日午後2時34分)